すずめ

小川未明

青空文庫

冬の日は、昼過ぎになると、急に光がうすくなるのでした。枯れ残ったすすきの葉が黄色くなって、こんもりと田の中に一所茂っていました。そこは低地で、野菜を作ることができないので、そうなっているのかもしれません。往来からだいぶ離れていましたが、道の方が高いので、よくそのあたりの景色は見下ろされるのでした。晩方になると、すずめたちは、群れをなして、森の中の巣へ帰っていくのでしょう。チュン、チュン、鳴き交わしながら、空を飛んでいきました。彼らが、ちょうど、そのすすきのやぶの上へさしかかろうとすると、ぱっとして、驚いたように、急に群れが乱れたのです。なぜなら、下のすすきの中で、声をかぎりに自分たちを呼ぶ友の声をきいたからでした。

「どうしよう、だれか呼んでいるじゃないか。」と、先頭に立って、飛んでいた一羽が、仲間を見まわしていいました。

「いいえ、いってしまおう。」といったものもあります。

「きっと、餌があるから、降りろというのだ。」というものもありました。

すると、中には、

「いや、そうじゃない。どうかしたんだ、助けてくれといっているのだ。」と、いったものもあります。

こうして意見がまちまちであったので、彼らは、そのまま先へ飛んでいくこともできずに、

すすきの生えている上の空を、二、三べんもぐるぐるまわって、話し合っていましたが、こんなことに、かかりあっていてはろくなことがないと考える連中は、

「じゃ、僕たちは、先へいくから。」といって、その群れは二つに別れてしまいました。

「まあ、ああいって呼んでいるのだ、いってみよう。」と、残った群れは、それから注意深く下のようすを探りながら、ぐるぐると空をまわってだんだん下へ降りてきました。そのうちに勇敢な一羽は、勢いよく、つういと、その声のする方へ走っていきました。つづいて、二羽、三羽と、後についてやぶの中へ降りたのです。

　このとき、どこからか、さっと雲のような灰色の影が、眼前をさえぎったかと思うと、たちまち網が頭からかかってしまいました。

「あっ、やられた！」と、思ったときは、もう遅かったのです。網の中に入ったすずめたちは、隠れ場所から出てきた大男の手にかかって、殺されてしまったのです。

「いま、五羽かかったね。」と、いう声が、往来の方から、きこえてきました。

　男は、また最初のように、かすみ網をひろげて、落としの口を開けました。そして、自分はあちらのやぶの中に隠れて、おとりのすずめを鳴かすように糸を引きました。こうして、鳴くことに馴らされたすずめは、しきりに声をたてて鳴きました。

　また、前のように、どこからか、新しくすずめの群れが飛んできました。

「おい、どこかで、呼んでいるものがあるじゃないか。」

「どこだろう。」

「あのくさむらのようだ、早くいってみよう。」

しかしながら、彼らは、注意を怠りませんでした。そして、彼らの中でも、ほかへ気を取られずに、まっすぐにいくものもあったが、どうしても先へいきかねて、声のする方へ引き寄せられるものもありました。やはり、一、二へんすすきの上の空をまわってようすをうかがっていたが、男が隠れているのに気づかなかったと見えて、六羽ばかり、一度にさっとすすきの中へ降りました。

男は、あわてたのです。大急ぎで、網の口を閉じにかかったが、すすきの葉にじゃまされて、手ぎわよくできず、ちょっとまごまごするうちに、二羽、三羽、下をくぐって逃げ出してしまいました。しかし、三羽ばかりは、ついに捕らえられてしまいました。

「あいつ、また三羽捕ったよ。」と、往来で見ているものが、いいました。

「ばかなすずめだな、さっさと飛んでいけばいいに。」と、いったものもあります。

このとき、男は、どんな人たちが、見ているのかと、支度をすませてから、道の上をながめました。

そこには、会社員らしい人がいました。小僧さんがいました。また、郵便配達がいました。それらの人たちは、いずれも自転車を止めて、わざわざ降りて、すずめをとるのを見ているのです。

「どうだ。うまいものだろう。」と、男は、網を張るたびに、かならず獲物がかかるのを、心の中で自慢していました。

「そうさ、これほど、おとりを馴らすのは、容易のことじゃないのだ。まだ暗くなるまでに、幾十羽ばかり捕れるかな。」と、男は、思いました。

見物人の中に、学校帰りの少年が二人いました。

「あのすすきの中のすずめが、鳴かなければいいんだね。」

「助けてくれと鳴いているんだろう。」

「そうかしらん。鳴いているので餌があると思って降りるんじゃない。」

二人の少年が、そんなことを話していました。すると、先刻網の中から逃げ出したすずめは、そのまま遠くへいったかと思うと、またもどってきて、田のあぜに立っているならの木の枝に止まりました。そして、しきりに、チュン、チュン、と鳴いていました。

この時分になると、東の方から、西の方の森を目がけて、帰っていくすずめの群れが後から、後からときました。

「ほら、またきたよ。きっと網にかかるから。」と、見物人が、いっていますと、すずめの群れは果たして、すすきのやぶの頭にくると、ぐるぐるとまわりはじめました。

枝に止まって、鳴いている二羽のすずめは、

「あぶない！　あぶない！」と、いうように鳴きつづけていました。

「おいしい餌があると思っているんだね。」

「そうかしらん。」

二人が、こんなことをいっていると、舞っていたすずめたちは、勢いよくすすきの中へ降りていきました。それよりも、驚いたことは、枝に止まっていた、先刻やっと網の中から逃げ出した二羽のすずめが、これも先を争って、ふたたびすすきの中へ飛んでいったのを見たことです。

「あっ、みんな網にかかってしまった。」

これを見ていた二人の小学生は、なんだか息詰まるような気がして、目をみはりました。男は、大急ぎで獲物を片っ端から殺して、袋の中へ入れていました。

「ばか！」と、このとき、大きな声で、どなったものがあります。それは、道の上で見ていた小僧さんでした。

「いいかげんに殺生やめろ！」

こういって、憤慨した、職人ふうの男もいました。すずめをかわいそうに思ったのは、二人の少年だけではありません。ここに立って見ているものが、みんな心にそう思ったのです。

「やはり仲間が捕まって、苦しんでいるのを助けようとして降りるのだな。」と、配達夫がいいました。

「まったくそうらしいですね。」

こんな話を、見ているものがしていました。これを聞いた二人の少年は、
「それごらん、餌を食べたいと思って、降りるんでないよ。」
「仲間を助けようと思って降りるんだね。」
こういうことを、二人が知ると、だまされて網にかかるすずめたちが、ほんとうにかわいそうになりました。
「こんな、罪になるものを見ていられん。」と、小僧さんが、急に自転車に飛び乗ってチリン、チリンと走り出しました。
「さあ、時間がおくれてしまって、たいへんだ。」と、配達夫も、また自転車を飛ばしていきました。
新しい見物人が、また足を止めていました。はじめのうちは、すずめのかかるのをおもしろがって見ているが、しまいには、後から、後から飛んでくるすずめが、だまされて、友だちを助けようとして、すすきの中へ降りて、網にかかるのがかわいそうになりました。
「はやく、日が暮れてしまえ！」と、腹立ちまぎれに、いったものもあります。すずめを捕っている男は、これで生活をするのか、根気よく、いつまでも仕事をつづけていました。見物人から、なんとののしられても、さも聞こえぬようなふうをして、すすきの中に隠れて、おとりのすずめを鳴かすのに、苦心していました。糸を引くと、すずめは、ほんとうに苦しそうに、鳴いていました。

このとき、二人の少年も、そこを去って帰りかけました。

「お友だちが呼んでいると、知らぬ顔をして、先へ飛んでいけないのだね。」と、一人は先刻、一度逃げ出したすずめが、ふたたび友だちを救おうとして、飛び込んで網にかかった光景を思い出して、いいました。

「すずめって、感心な鳥だね。」と、一人が感心しました。

「僕たちだって、泣いているお友だちを残しておいていけないだろう。」

「いけないな。」

「神さまから、すずめも仲間は、助け合っていくようにと教えられたのだね。」

二人の心は悲しかったのです。西の空は、灰色にだんだん暮れかかりました。すずめのそうした性質を知って、落としにかける男が、憎く思われたのでした。それにもまして、二人は、すずめたちの相互に助け合う心を美しく、貴く感じたのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　13」講談社
　1977（昭和52）年11月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館
　1942（昭和17）年11月
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2019年6月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

すずめ

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/